令和5年度 酒田市新田産業奨励賞 授賞式

酒田の元気を創出した3団体を顕彰

酒田市の産業振興に貢献した個人・団体を顕彰する「酒田市新田産業奨励賞」の本年度授賞式が11月6日、酒田市のガーデンパレスみずほで行われました。本年度の受賞者は不動産業の東洋開発、瓦屋根施工業の原田瓦工業、JA庄内みどりケイトウ専門部の3団体。新田産業奨励賞は1990（平成2）年に創設され、今年で34年目を迎えました。授賞式および同日開かれた酒田市新田産業奨励賞記念講演会の模様を紹介します。

さらなる飛躍の励みに

酒田市長
矢口明子氏

酒田市新田産業奨励賞は、平田牧場グループ会長で酒田市名誉市民でもある新田嘉一氏からの寄付を基に基金を創設し、1990年度から毎年奨励賞を贈呈しています。地域産業の裾野を広げ、産業の振興に大きく貢献された個人や団体のさらなる飛躍の励みにしていただくことが目的です。創設から34年目を迎え、これまで延べ87の個人や企業、団体の方々が受賞しています。

本年度の受賞者は株式会社東洋開発、株式会社原田瓦工業、JA庄内みどりケイトウ専門部の3団体です。東洋開発は働き方改革が叫ばれる以前から誰もが働きやすい環境づくりを積極的に推進し、今年6月には「ホワイト企業ランキング」で全国第2位に選ばれました。将来の地域社会を担う人材育成や環境づくりも行っておられます。

原田瓦工業は、使用済み瓦のほとんどが埋め立て処分となっている現状を改善し、廃棄物を再び収益を生む資源として再生させるという新たな事業を成功させました。環境、社会、企業統治に配慮するESG経営の先進的事例といえます。

JA庄内みどりケイトウ専門部は2014年に設立され、庄内砂丘の特産品であるメロンの後作としてのケイトウ栽培を主導し、規模拡大を図ってきました。高品質の維持によって市場における独自のブランドを確立し、オリジナル品種の開発なども行っています。

このたびの受賞を契機に、なお一層の活躍と繁栄を心よりご期待申し上げます。ご多用中にもかかわらず、ご臨席いただきました皆さまに心から感謝を申し上げます。

地元発展の努力に感謝

株式会社 平田牧場
代表取締役
新田嘉七氏

酒田市新田産業奨励賞を受けられました皆さま、おめでとうございます。本来は弊社会長の新田嘉一がお祝いを述べるところですが、都合により出席できません。メッセージを預かっておりますので、ご披露いたします。

今から40年ほど前、北港開発の頓挫、企業の相次ぐ撤退、市史に残る酒田大火など、酒田は良い知らせのないような状況に見舞われていました。何とかしなければと当時の相馬大作市長と弊社会長が話し合いを重ねていたところ、二人の思いに応えてくださったのが酒田市出身のエプソン社長を務められた故・中村恒也氏でした。衰退していく生まれ故郷に再び活気を戻したいという強い思いが東北エプソンの酒田進出の後押しとなり、新たな雇用の創出につながりました。

この地酒田で生まれ育った思いを未来につなぎたい、地元で頑張ってくださっている皆さんに一層頑張っていただきたい、という思いで産業賞が生まれ今年で34年目となりました。未曽有のコロナ禍を乗り越え、持続可能な社会の構築と地元産業の発展に向けて努力いただいている皆さまに敬意を表しまして、お祝いの言葉といたします。

受賞者のご紹介

株式会社 東洋開発

代表取締役社長
櫛引柳一氏

1994（平成6）年に創業し、不動産業や各種保険を取り扱っています。働き方改革が叫ばれる以前の2000年から誰もが働きやすい環境づくりを積極的に推進し、従業員が働きやすい職場であることを示す「ユースエール」や「えるぼし（3段階目）」などの認定を受け続け、23年6月に更新されたホワイト企業ランキングでは全国第2位に選ばれました。また、高校生が運営する一般社団法人への寄贈を行うなど、将来の地域社会を担う人材育成に向けた投資も行っています。

株式会社 原田瓦工業

代表取締役
原田　誠氏

1894（明治27）年創業の屋根ふき・修繕工事業を営み、県内外の神社仏閣や高級旅館など日本建築の瓦屋根ふきの実績があります。瓦リサイクル製品の開発や瓦パウダーを活用した瓦壁（建物の外壁、内壁など）を実用化しました。使用済み瓦のほとんどが埋め立て処分となっている現状を改善し、廃棄物を再び収益を生む素材として再生させ新たな事業化に成功したことや、素材の新たな活用方法を模索する同社の取り組みは、環境、社会、企業統治に配慮するESG経営の先進事例といえます。

JA庄内みどりケイトウ専門部

専門部長
佐藤広幸氏

2014（平成26）年に設立し、庄内砂丘の特産品であるメロンの後作としてのケイトウ栽培を主導、規模拡大を図ってきました。生け花、フラワーアレンジメントなどの商材としての需要が得られるように、色鮮やかで高品質な規格を構築し、主に仏花としての用途であったケイトウのイメージを一新させました。高品質の維持によって市場におけるブランドを確立し、代用ができないものとして高い評価を受けています。

酒田市新田産業奨励賞

新田嘉一平田牧場グループ会長からの寄付を基に酒田市が設置した「新田産業振興基金」を活用し、地域産業の振興に大きく貢献した企業・個人・団体に贈る賞。さらなる飛躍の励みにするため奨励金も授与されます。1990（平成2）年度に創設されました。進出企業の撤退などで酒田の経済が低迷した時代から「地元で奮闘する方々を応援することで古里を元気にしたい」と考えてきた新田会長の思いが込められています。

受賞者と来賓の方々

酒田市新田産業奨励賞記念講演会「日本の未来と地域への影響～選ばれる地域になるために」

講演

一柳良雄氏
一柳アソシエイツ代表取締役CEO

一番大事なのは良い土を作ること

今、私たちは大変な状況の中に置かれている。国連が機能しない秩序なき国際関係に加え、デジタル社会になって過去の成功体験の延長線上では答えが出てこなくなった。

そうした中で大切なのは何か。きれいな花を咲かせるために一番大事なのは「良い土を作ること」。会社も人間も、目に見えない土台の部分が大切だ。このことが地方創生においても基本になる。

成長が見込める「かきくけこ産業」

今後を展望する上で「かきくけこ産業」ということを頭に入れていただきたい。「か」は環境エネルギー関連。「き」は規制緩和関連事業で、農業や運送業などが該当する。「く」は暮らしで、豊かな暮らしを良くするような産業。「け」は健康・医療・福祉関連。「こ」は高度情報通信。これらの要素を抱えているところは伸びていくし、こうした分野で新たなヒントもどんどん出てくるだろう。

人間力を養う「三つの場」とは

地域や会社を引っ張るリーダーの共通点が三つある。一つ目は夢やビジョン。これがある人は軸がしっかりしている。二つ目は知恵と情熱。知恵とは他にまねできないことをやること。情熱とは同じことをやり続ける愚直な泥臭い努力をいう。三つ目は人間力。これを養うのは修羅場、土壇場、正念場の「三つの場」だ。

田中角栄は大蔵大臣に就任した際、官僚に「僕は高等小学校しか出ていないが、勉強するから教えてくれ。ただし決断の責任は全部自分が取る。君たちに責任を押しつけはしない」と言い、人心を掌握した。角栄の著書「日本列島改造論」は今も売れ続け、50年前の発言が今も事業として残っている。軸があり志のある人間に人は引かれるものだ。

芯が通り、気を使う「鉛筆人間」たれ

国づくり、地域づくりは最後は「人」。一人一人の自覚にかかっている。自分が納得する有意義な人生は何かという自問自答をしながら、自分の軸を持つか否かでリーダーの資質が決まる。もう一つ、明るく楽しく面白く生きること。そうすれば仲間ができ、仲間は資産になる。

中に芯があり、周りに木（気）を使う「鉛筆人間」になっていただきたい。

鼎談（ていだん）

一柳良雄氏 × 関根近子氏（Bマインド代表取締役社長）
山中大介氏（ヤマガタデザイン代表取締役）

地方創生で重要な「三銃士」とは？

関根　庄内で事業を興すきっかけは。

山中　縁あってベンチャー企業に転職し鶴岡に来た。地方での「価値創造」を事業にして9年がたったが、庄内の可能性は大きいと感じている。

関根　違う視点から見ると庄内の素晴らしいところが見えてくる。物の見方や捉え方（パラダイム）を転換するにはどうすればいいか。

一柳　まずは「縁」。自分がいいと思ったら取りに行けば、面白い世界がどんどん広がるだろう。地方創生において重要な役割を果たす人たちを私は「三銃士」と称している。よそ者、ばか者、若者の3者だ。よそ者は外から知恵を持ってきてくれる。ばか者とは情熱を持って地域をまとめようとする人のこと。そして持続可能な形にするためには若者の力が必要だ。

関根　何事も失敗を恐れずにやってみることが大事なのだろう。

一柳　山中さんは異端者だと思うが、異端者は認められた瞬間に最先端になる。

山中　異端者と言っていただいて光栄だ（笑）。庄内は外から来た人を見極め、受け入れて徹底的に応援してくれる。

関根近子氏

地元の挑戦でつくろう働く場

関根　地方創生が叫ばれて長いが、喫緊の課題は何か。

一柳　働く場所がなければ何も成り立たない。企業誘致には私は反対で、地元の強みを生かす方向で頑張るべきだ。地元の人たちに喜んでもらえる最適解は何かを自分たちで決めて挑戦することだ。行政にお願いしたいのは、ベンチャーの新しい製品やサービスを試し、人に広めたりアドバイスをしたりして、きっかけづくりをしてあげることだ。

関根　事を起こす時、最初に戦略を立てるのか。

山中　戦略は立てても課題は出る。課題は直すぐらいで動き出さなければスタートはできない。

大義と共感がベンチャーに必要

一柳　地方創生のベンチャーには「大義」と「共感」が必要。それがあれば裾野が広がって大きな動きをつくることができる。

山中　歴史と信用があり人材もそろっている地域企業、老舗企業がベンチャー化していけば、勝ち抜く地域づくりができる。

関根　地域の企業・団体がさらに頑張ることで地域経済の発展につなげていくという意味では、新田産業奨励賞のような顕彰制度は意味がある。

山中大介氏

広　告

酒田市

新田産業振興基金
酒田市本町2丁目2-45　電話0234（22）5111（代表）